海

A2200806　上野　咲

●研究概要

短大で学んだ漆の技術を用いて、新しい漆の表現の方法を考える。

●研究背景・目的

私は短大に入学し、クラフトゼミに所属して初めて漆を学んだ。それまでは漆というと器物のイメージしかなかった。しかし、ゼミの活動のなかで漆を学び、また展示会や作品展で漆の作品を見ていくなかで、私の今までの漆のイメージはがらりと変化し、漆は様々な表現ができるものだということを初めて知った。そこで、卒業研究は漆の造形作品を作り、今までの漆のイメージを変えるようなものを製作したいと思った。

学生生活最後の作品を作るにあたり、どのようなモチーフにするか考えた。そこで、私が昔から興味を持っている海をテーマに考えてみた。海や水族館に足を運ぶと、癒されると同時に少し恐怖感も感じる。水中は魚や珊瑚等が作り出す美しい景色があると同時に、人間が住めない未知の世界でもある。美しいけれど同時に怖い存在。そんな海に昔からとても心惹かれていた。特に、魚のなかでも私はマンタに非常に興味を持っていた。マンタはエイの仲間であるが、巨大な体で海のなかをゆったりと飛ぶように泳ぐ姿はとても美しく、ダイバーにも人気のある魚である。しかし一般的な魚に比べエイというのは薄く平たい体で、少し不気味さも感じていた。そんな巨大なエイであるマンタを思い浮かべ、私の思う海を表現するのに最適ではないかと思った。加えて、滑らかな体なので漆の持つつやを活かしたデザインができるとも思った。以上の理由から、短大生活最後の作品をつくるうえで、熱意をもって制作に取り組めるモチーフだと思った。夏季休業中は沖縄の水族館へ行き、実際にマンタを見て動きや細部をじっくり研究することができた。

また、漆の作品を学祭で展示させた際に、「これは漆なのか」「どのように作ったのか」など、多くの質問を受けたことがあり、その時、私が作った作品で漆に興味を持ってもらえることを実感し、とても嬉しく感じた。漆で造形作品を作ることは、器物のような実用性は無いかもしれないが、漆には多くの可能性があることを、見た人に伝えられるのではないかと思う。

卒業制作は、自分がずっと興味を抱いていたモチーフを漆で表現し、今後の人生にも影響を与えるような納得のいく作品を作りたいと思ったため、このようなテーマで作品作りを進めた。

●製作工程

１．スケッチ
２．大きさを決定　切り出す形を具体的に決める
３．スタイロフォームの切り出し
４．細部の作りこみ、調整
５．砥の粉ボンド
６．布着せ
７．メスリ　※６と７の工程は強度を上げるため２度行う。
８．下地　平面が出るように数回行う。
９．下塗り
１０．追い錆　平面が出るように行う。
１１．仕上げ塗り
１２．磨き、仕上げ作業

2009年度 卒業研究ゼミ発表要旨集

●デザイン

素材：スタイロフォーム、木、麻布
サイズ：180×90(cm)

●工程、作業の様子

おおまかに切り張りしたスタイロを鋸やカッターなどを使って削り原型を作っていく。

研の粉とボンドを合わせたものをスタイロに塗る。

細部の調整を行う。

布着せ　強度を上げるため、麻布を糊漆で貼り、その後メスリを行う。
この作業を２度行う。

下地をつける。乾いたあとに研いで、表面の凹凸を減らす。

乾かすための風呂。中の湿度を上げるため、噴霧器を使って湿す。

▼作業の様子

作業場の風景

布着せしている様子

実際に見てきたマンタの写真とスケッチ

●考察・感想

私にとって長い期間をかけて、ひとつの作品を制作することは初めての経験であり、勉強になることが沢山あった。始めの作品の提案の時点で、何を作るか、なぜそれを作りたいのか、考えを深めていくことは大変だったが、同時に自分自身を見つめなおす機会となった。また、ゼミ生と案の発表をしあい、お互いに考えや意見を伝え合ったことで、より考えを深められたと思う。反省点としては、作業が思うように捗らず、また原型制作に予想以上に時間を費やしたため、後の工程が遅れてしまった点である。しかしひとつひとつの工程が進むにつれ、作品を作る喜びを感じた。私はクラフトゼミで、手でものを作ることの大切さを学んだ。現代ではパソコンでの作業が主流になり、自分の手を動かしてものを作る機会が少なくなってきているように思う。自らの手でものを生み出すことは時間も手間もかかるうえ、手先の微妙な感覚なども必要とされるため一朝一夕で技術を習得することは困難である。しかし、それがアナログの良さであり、じっくり時間をかけてものを作ることの大切さと楽しさを学んだ。短大で学んだことを、今後の自分の人生でも大切にしていきたいと思う。